さの本

七

哥と詞を名らきも

[V. 10]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 10
copy 1
Asian
Japan
case

LIBRARY OF CONGRESS THE

2004551302

15

源氏廿二戈の九月より廿四の夜までを

秋夜の月くぐりちかうなりゆまくに月(ミヤモドコロ)見所もの
心ぼそくおもほせ・やむごとなくわづらひしき物に
おぼしなりし・大夜の君(葵)もうきなて後・さりとも
と世の人もきこえしありかひ・こやのうちにも心どうさ
めききしを・そのうち志もかきてて・おきましき月
もてなしをこゝ給に・夜ことにうしとおぼしことこそ
なりかめと・志りそて給ぬれば・よろしの衰をおぼし
まて・ひさこゝちにいでこち給・おやそひてくぐり給
れいもことになれど・いとこゝろちぐるさ月あり
さ夜なるにことつけて・うき世をゆきそなれなん
とおぼしに・大将(源ん)の君さすがにいまはとかけそなれ

給なんもくちおしうおぼされてれをうそこがり
ハ衣なるさ海にてゝらびくゝらふゝらいめんし給ひん
ことをだいまさらにあるまじきことゝ。女君(れ息不ん)も
おぼせ。人(係)ハこゝろげきなしと。おもひをきぬふ
こともあらんに。けれ(れ息不)ハいますらしおもひこゞるゝこ
とれ海さうぼうきを。おいなしと心づよくおぼせ
なるべし。もとの(六条京極ノ大ノ)殿にハあらさ海にけり給おり
くあれどいとうしのびゐへバ。犬(係)ね殿えしり給ハず
ことやすくれこゝろにまゝをて。まうで給べき
れ(聖ニ家ニ)ことゝにあらねバおぼつるくて。月日もへ
ごとつしぬるに。院のうへおどろくしきれなやゝ

まはあらでれいならずとさぐなやませおへぐ
いとぐ(源ふ)れ心のいと厳なれど・けらさまれまおもひ
まて給なんもいとおしく・人さるなきけるくやと
おぼしをうして・のゝ家にまうで給・九月七日なり
なれば・むげにそふあてとおぼすに・女ぐこまころ(五貞本)
ちらしそれど・こちながらと・こびくれせうそ
こありそれば・いでやと(五貞本)はおぼしわづらひながらい
とあまりむまれいこさ給・まれごしぢりのこい
めんたと・ひとさしれどまちこさてし給なり・ゆゑ(源)そさ
堅(の)邊(べ)をかいり給よりいと抱あれなり・私のゆゑ
まれおとろへけ・おさぢがつらもかれぐなる虫

のほ拡風をごく吹あれをて、それことも望(きく)わ
れぬ程は、もれて孫どもこしぐきてしこる。いと
えんなり。むけましきごをん。十よ人ぐらり。こずい
ぶんことく志さすがこなしで。いこう志のびぬへ
れどことはひきつくろひぬへるれよういいと見
でこくこしこまへバれともなるすきもれども。而
からさへ身ましこておもへり。れ(涼)ころはもなどて
いまで。こちるらさぐりつゝんと。すぎぬかこゝや
しうおぼさる。拙ろなすげなるこしぶ。おほがさ
まて。いこやどもあらりくいとうりそめなれり。
ろろぶのとりぬどもはさすがはうりくしく。

又三

ふしつきされて。けづらりしきそしきなるに。かんづ
りされもれどもこゝろしこゝろにうちしたしぶきて。をのが
どちもれいひこゝろけそひなども。ほかにそさ海かは
里てこゆ。ひこきやかすかにひかりて。ひとげすく
なくしあぐとして。こゝにもれおもそしき人の。
月日をへぶてのへらん程をおぼしやるに。いとい
こじう哀に心ぐるしふのこいのさるべきところに
こちうくれのひて。れをうそこきそしのるおそびハ
これやめて。心にくきけもひあまたゆゑゆゑなるくれ
の人づくのれせうそこだらりて。これ息ゆ。いこい
めしのべきさ海にもあらねば。いともれしと

おぼしてかやう(源行)のありさまも。いまはつきなきさまに程に
なりまて侍ぬおぼしたるがうしめれはうるさ
もてなしに夜ふていぶせう侍事(こと)をもあさうらめ侍
ましがれと。まめやかに四人の人が人ぐげにいゆ
かさきらいてうさらひづらせ給に。いとおしな
どあけかひきこゆれば。いさや(法息所心)こゝの人めもこゝぐ
なしうかれおぼさんこともひかくしういで
ゐんがいまさらにつくましきことくおぼすに。いと
もれうそれどなさけなうもてなさんにもしけうら
れバとうり打なげきやもしひてゐざりいでもてる
けけらひいと心まくしこゝるに(源)はすのこぞうりのゆう

されハ行やとてのがりぬらまへりぬるやうにさし
いでらるゆふづくよまうちふるまひらまへるさ海
よほひまなもれちくめでらし月（源）どろのつもりを
つきぐしう思ひ給ふもまばゆきほどに女に
それがさうさ我いさくかありても給へりけるとさし
へてかたしぬ女をしるべまてこそいがさをもこえ
侍るそれぞも心うくとこそしまへど
神（法息所）がさはしるしのすぎもなきものをいる
まづへておれるさうさぞとこそしまへば
とゝめこが何なりとおもへばさうも葉のう我な
けうしをとめてこそおれ

おほるのけちひつづかしかれど、(源)寺ゞりはひきて
てなげしまとしかりてねまへり、(源心)心まかせてえそ
まつりいべく、人もしるひざ夜まおぼしたりいる
とし月はのどかなりつゝ此心をぞりまさしもおぼ
されざりき、まる心のうちまはいかまぞや、きずなりて
心さへて給ましのらぞるあそれもさあつ、うくれる
りもへどうりぬるぼ、めづらしきれさいめんのむかし
おぼしたるまあそれとおぼしこぞるこれ
かざりたまし、きしかるいさきおぼしいぐ音
られて、心まちくなきなぬ、(源息)ぬはさしもえしじとおぼ
しつくむめれど、えしのびまもぬれかしきを、(源心)いよく

心ぐるしうなる（原詞）おぼしとまるべきさ海をぞ思ひ
給ひ月もいりぬるまやあたれるるそらをたすがめ
けうしこそさしぬるこ（地）ろおもひあけ先さ海
へるつらさもこさしぬべしやう（仙息）くいまはとおもひ
たまれのへるまされだらまと中こ心うごきて
おぼしこぐる飯（てん）ぶ（地）のわかさんぐちなどうちつれ
てとうく立ひづらふなる庭のこずまねもげまえん
なりるまうけぐりこるありさ海なりおもほし
のこすことなきれなりしひまさてしかしく給こと
どもまのびやしんるなしやうくあけけ雲乃
氣色ごとさしるつりいでこんやうなり

曉(源あかき)のわかれをいかもつゆけきをこはよ
しらぬ秋のそらに(源)いでがてまれてはしらへてやす
らひこまへるいらしうなりかし(池)風いとひやゝな
ふきて松虫のなきかしこるこゑもおりしり
がれたるをさしてしつことなきごとにさてぐし
がるげなるまましてけりなきれ心まどひぐもは中
くこともゆるぬまや
大(源)かたの秋のけれもかるましきまなく孫なそ
へそのべの松虫ゝやしきことおほかれどかひ
なかれば明ゆくそらもけしこるまくて出ぬこちの乃
雅いと家々し女(九息所)も元心づよからず名ぬあはれまて

なぶめ給ほのゝそてまつりのへる月かげのれかたち
なほとまれるまほひなどけうさんごとも身は
しめて、おやまちもしのべくめでさこ也、いかぞうり（地人ぞん）
のゝちまてかかりれありさ夜をゝすてゝ、けかれ
ゝてしんとあいなくなりゝぐぐゝあつりれ（係）なるゝつ
よりもこまやかなるハおぼし（は息）なすびくがりなれど
まゝうちへしさゝめかるのへきことなりねど
いとひなし、おとこ（係地）ハさしもおぼさぬことをぐり
なさけのゝあまハよくいひしぶけのへかめれば、夜
してをしなべてのつゝまは、しのれしのハざりしれ
なりれかくてそむきのひなんとするをはおしう

又七

ヌ七

もいとおしうもおぼしなやむべし。猿(ぎ)のれさう
ぞくよりちじめ人ぐのまで。なまふれのれでうど
などいかめしうめづらしさき夜まで。とふらひ罵(きこ)
めんどなまよともおぼされぞ。おはくしうこて
ろうさゑをのゝなぐして。おさましき身の有様
をいまちしめたらんやうに。ほどちらくなりまくに。
おさふしなげきのふ。愛宮(さいくう)ハけりきれ心に。不定(ふだやう)なり
いつれいでたちのうくさゝまりゆくをうれしと
のゝおぼしたり。世(地)の人ハれいなきことゝ。もどきも
哀にもさ夜ぐにきこしめべし。何(なぐ)定も人にもどき
なりけれぬきはゝやもげなり。中く世にぬけ出

ぬり人のれあらりはどころをきことおほくなん。十
六日うつゝ川まてれちらへ志のふつねの義式(ぎしき)は海さ
まてちやうふぞうしなどさらぬかんぞちめと。
やむごとなくおほしある代えらせのへり。院(ゐん)のれて
ろらせもあれバなるべし。出のふほど大(原)将殿より例(裏)
のつきをめことでも罪しのへりかけ海くもりしろき
おまへはとてゆふまつけくなる神ぞまして
(原)やし海もりくるいミ神も心あらばあ。ぬる
れの中をことゝれ忘ひのあるまあるぬこちし
約れどすりいとさはがしきほどなれどれ人
まありぶ(秋)の(秋)れをだし女別(べつ)当してかりせきまへり

かもあり。家の所をだし。女郎一面してかくせしまへり

（法息云 さん宣の御歌）

くまいりこそしてまことなり中なりしがなをざり

ごとに我まじやうごさん。犬ねは所有侍ゆりしうて。

うちまもまつら同しうおほをとうちずてられて

ミをつくんもひとまるを心ちしこまへばおぼし

とまりて。つれぐまながめぬまへり。家（訳）の所かへり志

おとれくしき我（係）ほくゑこてこゐこまへり。所（訳文）とし（係心）

の同じよりはおかしうもおもすべきかるとこぐな

らもで。（地）やうまれいてりこぐへるゆづらもしさる。

かるゝずこゝろかゝる所くをまていとようこそて

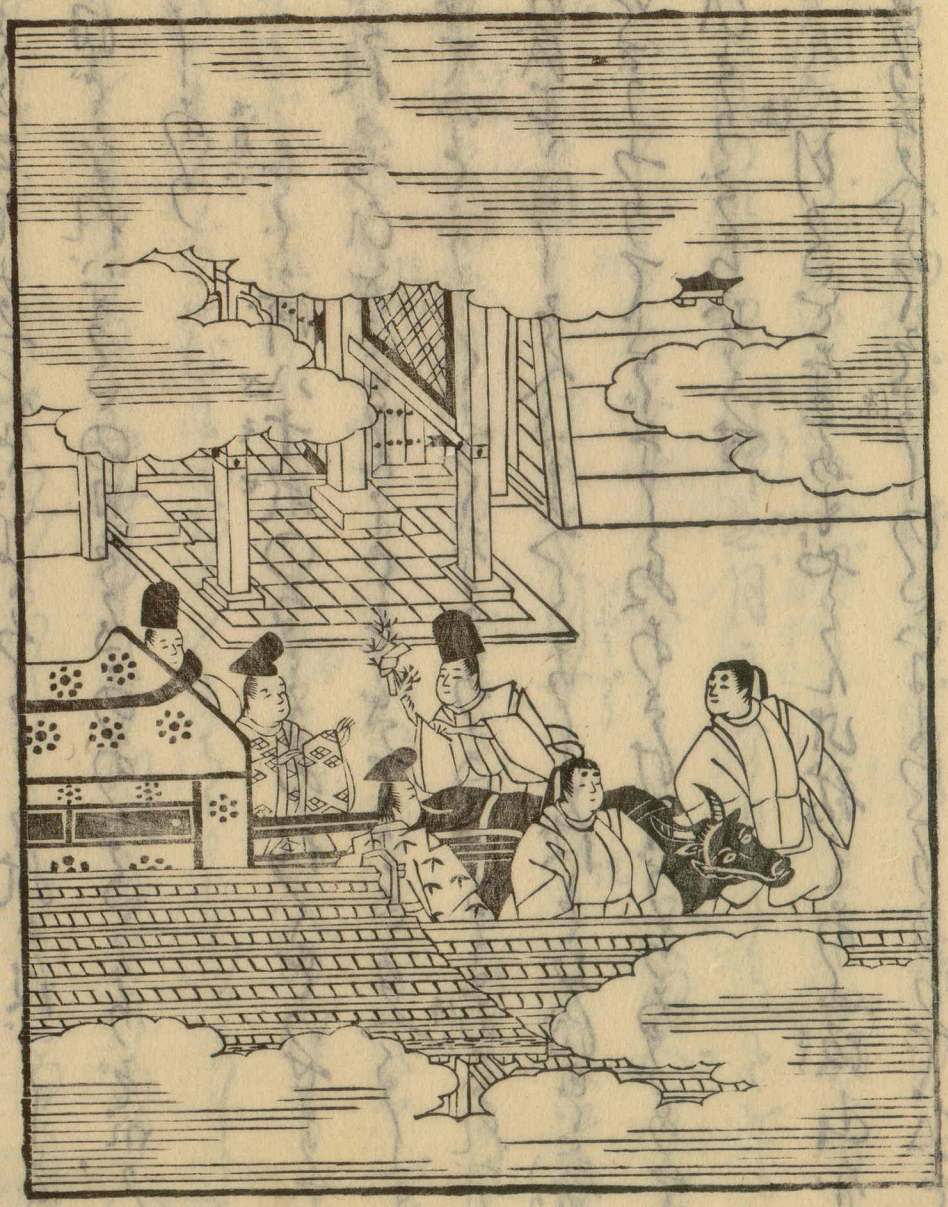
まつりいべかりしいたけるを所ほどをこずなり

ぬかこそてねるされ。世中さざめなすれば云めする

やうもありなんかしなどおぼせ心（秋宮）まつてよしあり
はけれひなれば其ゝ車おほかる日なりさるの時
ようちまいり給ふやせ所はこしまのり給へる
まつけてもちゝおとゞのかゞりなきすぢなり
おぼし心ざしていゝきこそまつりなひしあり
さ夜かたりてさる心の世ようちをこ給まも地のこ
いきをすあられりおぼさる十六（地）まてこ家（前法）なり
まいりなて其まてをくれこそまつりなふ其まて
ぞかふまるこそのへをこ給ける
その（此息）神をかふそかけしと志のぶれど心乃
うちまれぞかるしき秋宮（地）は十四まで女なける

いとうけくしうおもすろさ海をうかりしうしてて
まけりさ海へるぞいとゆくしきまでこそ海の
ミうぐれ心うごきて別のれくしてまつり給いと
あれまてしほられさせなひぬいでなほまちこそ
まけるとて八省(はちやう)にてつゞけるいざしぐるか海
どもの袖ぐち家あひもめなれぬさ海に心まつきけ
しきなれば夜上人ともくはこくしのまれおし
むおほかりくろういでなて二条より洞院(とうゐん)のおほ
ち波おれ給ひど二条院のまへなれば大(源)将の恵
いとあれにおぼされてさうしにさして
(源)ふりしてくりふきりともしてぐ河(ガハ)やう

せのなまえる袖をぬれじや



とさてまゐれどいとくらうまれさはがしき
ほどなれがまるの日をさのあるこよりぞれかへ
しあり

（古息本）しぐか河八十瀬（せそせ）のるゝまぬれくどいせまで
これかしひとこせんことそくぞてかさまへるしも
れていとよしくしくなまめきこうまゝおられなり
（添ん）けれどこうしそへこまへくまゝしかばとおほせて寡（きり）
いこうかりてこゞなるぬあさけまうちながめて
ひとりごちおもす

（添）りるとながめもやらん此粘をあふ坂（さか）山を
こきりなへぐてそぼし（添）のこいまもいこりまりでひと

やつしなすず把さびしげなるがめろくし給まして
さびのそらにいかるれ心づくしなることおほかり
けん。院のれなやこ神無月(うこな)になりてもいとをも
くおくしまして世中におしこさてぬ人なし。
内(朱雀)にもなげしなげきて、引筆(ざやうグう)あり。院よりきれゆち
にも、玄(冷泉)のれことをゆゑアルさせなて、つぎには
犬持のれこと。侍(院司)つる世にかりしず。犬小のことをへぐそず。
なまごともれうしろこと笑(おが)せ。よりひの程よりも
代をまつりごとむにも。おさくしたぐりあるまじう
なんこなふる。かるしず世中にも引べきさうある人
なりさるまよりてひづらりしさる。みこにもなきず

さく人にておほやけのれうしろう伐せさせんかく
思ふおへしなりそれ心ぶへさせ給なと。あそれ
なるれゆいごんどもおほかりそれど。女(地)のまねぶべ
きことにしあらねば。これかたちしごまかるなり
いるし。みかどもいとかるしとおぼして。さらに
ぶへさてしさすまじきよしを。人をてくさてし
させ給。れ(れ門)かたちもいとさよりにねびまさら弱
きまへるを。うれ(院)しくこれもしくこそまつらせ
給。かぶ(れ門)ちあればいそぎかへらせ給にも。中々なる
ことおほくなん。去家もひとこびにとおぼしめし
そしども。柄さはがしきまより。日をかへて(院へ)ゆうらせ

なれども。抱さはがしきまより。目をくへて。ゆくらせ
のへり。れたしの程よりはおとなびうけたしき。れ
さ夜まで。院ひしとせひこさてしさせ給けつもり
まなる心もなくうれしと覚してこゝそまつり給。
れ乳色(けしき)いと衣なり。中(なつが)家はなまぶまさげこのへるを。
院こゝそまつらせ給にも。さ夜ぐれこゝろこゝぶれてお
ぼしめさるゝよろげのことをこさてしさしせ給へど。
いと(長家)もれたるゝされほどなれば。うしろめたくれ(院人)
しうこゝそまつらせ給。犬(源)ねまも。おほやけ(院司)
つうまつりのべされこゝろづかひ。これこや(長家)のれう
しろこしのべさことは。かへしくの給ひす。東(長家)
かけてぞかへらせ給。のこゝろへなくつうまつりて。

のこしたさ夜、川(ぎやう)幸(かう)まおとりけぢめるし。あらぬ程
にてかへらせ給をいさしう(院ん)おぼしめす。おほ(恵拓)ぎさ印
もまいり給たんとする代中(なつか)宮のかくそひおいする
ま、れ心(恵拓)とかれておぼしやしらふほどまおどろく(院)
しつさいさ夜まもおいしまさでかくれさきなぬあしを
そらまにまどふ人おほかり、れ位(くらゐ)をさらせ給といふ
どうりまこそあれ世のまつりごとをしげめさせ給
いることもいが、れ世のおなじごとにておはしまい
ける代みなどいいといろうおいします。おほぢおとぐ(太太臣)
いとこさうまさがるうおいして、それ、れまくまなり
なん世をいかるらんと上達(うんぎちめ)ア殿上(てんじやう)へこれおもひ
なげく中(なつか)宮大(ほ)将殿などいましてしばれて其

なん世をいかゝなんと上達ア殿上へ[illegible]

なげく中宮（若ウイ）だ[illegible]殿などにましてそぶれて[illegible]

もあぼしけれども のちくの[illegible]わざなまど けうし（孝なまと）

[illegible]うまつり給さ[illegible]もたゝつらのみこゝちの[illegible]

まそぶれゐへる[illegible]ことなりなぶらいとあくれる

世の人もこゝてまゐる

ふぢ(涼)のれぞよやつれたまへるにつけてもかぎり
なくこさよりはこころぐるしげなり。こぞことし
しとうちのぐさ。うるなことをこゝ給ひ。世を
いとあぢさるうおぼさるれば。うるつゐでにもまづ
おぼしたるくことはあれど。まるさ海ぐのれ
かぐしおぼり。れ四十九日までは。女れこゝやと前る
ち。これ院にのとひたまへりのるをとゞざぬれば
ちりぐるまゝで給。志くすの廿日なれば。おぼりる
のよれ中とぢむりそしのりしきにつけても。
ましてくるくしるさ。中宮(若つぼ)のれうろのうちなり。
お(無)ぼざきれのれ心をもしりまへれば。うろりまゝせ

こまへらん世のくしこるく。すこうからんとおぼと
よりもなれさてはへるとしげのれありさ海を思
いでさてはちめとさのまるさまくてもおそ
し海をまじうこれほかくへと出給程まうるしさ
ことうさりなし。家（荷つか）は二条のこやまをうり給れ
むかへは兵ア（ヒ）家まつりこまへり。ゆきうちくは
風ふげしうて。院のうちやうく人めかれゆきて
しめやうるは。犬（源）狗殺こるくはまつりはてふるさ
れ抱護さてし給。おまへのめえうの雪はしほれて。
しろ枝（え）かれこる波ことまてみこ（兵ア）
かげひろこしれこし松やかれはけんしろ葉ち

かげひろこゝれこし松やうれまけんしたゝ葉ち

里川年の暮うなたまぢりのことまもあらぬよ。
ありうらもれあられまて。犬将(係)の山袖いたうぬれ
ぬいけのひまたようこゝかれなる
さえ(係)ゆたる池のうゞんのさやけさるゝるれし
かげとこぬぞうるしさとおぼしまたまおまりわる
ゆかしうぞあるや。主命婦(まうしやうぶ)
さしくれていたるの水もこほりとぢこしひと
かげのあせもりかな。地もつゐでまいとおほれどさ
のこうきつゞくべきことうは。ゆたらせ給ぎしき
かたらひどもひるしまあられまて。ふるさこやハ
くりてたびの心ち志給まも。山さとゝずこしたる

とし月のほどおぼしめぐらさるべし。としうつり
ぬれど世中いまめかしきことなくしげうなり。
（源）犬ぬ髪いまれうくてこもりゐる海へり。ぢもくの
ころなど。院の此時をばさらなもいとぞとしごろ
おとるけぢめなくてみかどのわたり。ところなくさ
ちうえたりし馬車（むまくるま）うすらぎて。（三ケの大きなく）とのゐもれく
ふくろおきくこしずしたりしさけいしぐらかことま
いそぐことなげまてあるところ給はも。いまよりハかく
（苦しかん）
しそくとしひやしれて。ものとさ海じくなん。み
（勝月）
うしげどのハ二月まかいしのうえまなりまぬ。院の
此思はやがてあまりまなりまへるまたりなり也り
（院のおりひ人これとなし）
やんごとなくもてなして。人がらもたくらしけ

れ思ふやがてあまるまなりあへるまつりなり思り
やんごとなくもてなして人がらもいとよくおけ
まればあまるまつりあげまり給中にもとぐれて
時めき給。君いさとがちるおりしまいてまつり給時の
れつぼねまはむめつがとしられど。うきでんまは
りんのきこしめし給。登花殿のむまれたりけるり
これぐしうなりて。女房なども数しらずほどひ
まいりていまめしうさなやぎあへど。れこころ乃
うちにしひのほかなりしとぐも給。思れがうつうな
げき給。いと思びてりよりし給ことにる給おなじ
さ面なるべしものこさてもあらばいかなるんと
おぼしながられいのれくせなれば。いましもれ心

さし海さう尾うめり。院のおりしましつる世こそ
はぐうりまひつれ。后の御心いちはやくて。うらぐ
おぼしけめることどもれむくひとんとおぼせ
べかめりことまふれてりしるさことのこいでく
れば。うるべさことくはおぼしくらど。こまりこ海
くぬ世のうさまこちまふべくもおぼされど。左の
おほいとのもどさ海じさ心ちしまてことようち
まもまいり給はず。姫君をひきよぎて。この太后の
君は宮へつけまし御こころを。后はおぼしをさて。
よろしうもおもひこそてしまはず。おとくの御中も。
もとよりそばくしうおはする。右院の御世なりし。

まどはるるそばくさうおもきす。故院の御世ありしに
〔左大臣〕わがまはおもしと時うつりて。〔太大臣〕さうりげなくかへり
おくすれば。〔左大臣へ〕おぢきこえしとおぼしさまもおとう
ありけれ。〔源〕大臣はりしはらくず。はらうまひのそざ
みてひしへだてをも中々にはうちあはしおぼし出て。〔とこと〕
わかぎみは〔夕霧〕うちつゞきさひきこしくるまへることりきさん。
ふかればおそれはうりがきされいろとうちつげ
こまやのことざもおもじき海なりけり〔源〕きされ
お源のおぼうちまれさはがしきまでいと海ちげに
こしなしをうちひのひし示じくもうくくまうし
娘しとどもおかうくしきれしのびのりけ
も。おいつうおぼしなりてしまし給はねどいと

のどやうにいはうもあるまじきことなれば
うのさいのひめぎみのれさいくをせ人もめでつかま
が酒をなども人をれどこあまりへのれいのりの
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま
をうをくをうをくまくうをくみこまをを面をうつま

ざりかれど、さるべき女みこやおはせざりけん。（涼）だ物の
まいとし月ふれど、なほ此れこころはなれ給。そざり
けるを、かうすぢことまたまり給ぬれば、ろちおしと
おぼして、中ねまをとづれ給こともあるじどまて。
（豹かの女ぞこと）
此ふたまどはたしざるべし。（涼ん）むかしまかくの此あるを
さ海なまど此はことまたまとも、おぼしたまず。やう
のたりなしごとくに、も此、かかぐなくことなるまもくま
しるるかるることおぼしなやめり。みくどは、院志
此遺云（ゆいごん）たゞへむ。あられまおぼしたれど、ウうお
たしまもすうちまも此心なまびたりかるますぞて。
つまたまあおたしまたあるべし。母（熱病）ぞまれおぼぢ

おとゞ（左大臣）とりぐまを給ことはえそむきまゐらせ代の
まつりごとは心まかるまゐやうなり。まづ〻りし
さのこまゐされど。うんの君は人をれぬはころざし
うらへばうりなくてもおぼつかなくはあらず。五ごん
のこ源ほうのたゞめまて。（清）しこおもし
まゐひまほうがひて。例の事のやうにこそ給
れ。（むし）おぼしたるほそどのくつぞ。つり。中納言（勝月の如ごう）の
君まゐざらりて。いれ（源を）てまつりたり。人めもたげさ比
なれば。（源ん）うもたしぢうるるを。弟おそろしう。笑
ゆ。朝夕にこそてまゐりひとざまあらぬはさ海なれば。
まして。めづらしさほどまのこあるはしさいめれば。

まりてめづらしき程どほのしあるかれしへめしぶり
でうはとろかるらん。女のれさ海もげまぞめでら
きれさうなる後まりかるかたいかぐあらん。おか
しうな海めさ。わかびたるこちらして。みまかれ
しきれけてひたり。ほどなくあけゆくまやとおぼ
ゆるまたぐらくまたもとのぬ戸さつらぬとこは
げくるなり。まぐこれつたりまくろへたるこれ忘
げかさぞあるべき。ちらぐさなるさくへのとしへ
おこすうぞかしと。ぶ(源)ねハさく給。おしさものうら
まづらりし。こくかしこしぶねありさて。とらひと
(とのゐの人近衛司と弱文)
けとりたり。女ぞ
(膠月)心うらうぐ袖をめしをれけくとしつる

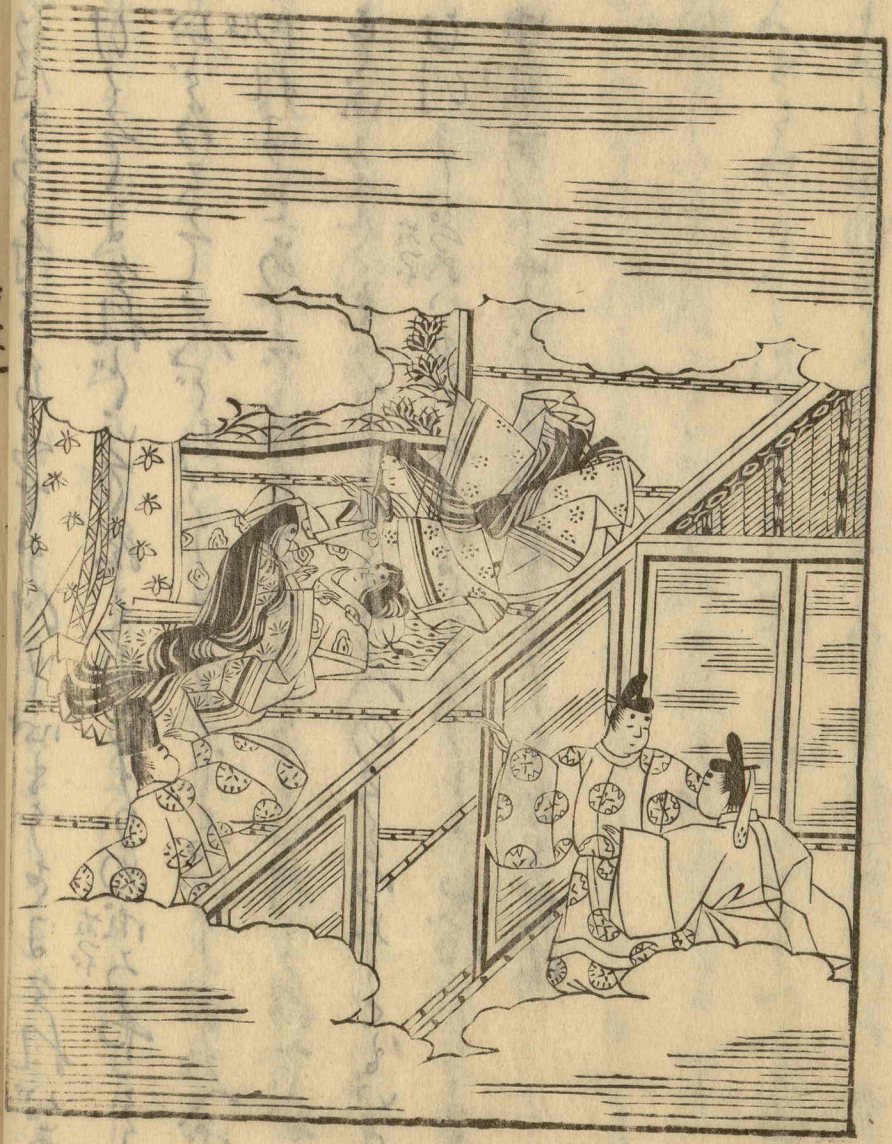
十戸ようけてもどの給さ海をかぶちていとおかし
ちげさつて口が身をうくてすぐせとやむねの
あくべき時ぞともなく志げ心なくていでまひぬ夜
かうさあかけき月夜のえもいはずきうけられるに
いといたうやつれてかるまひるしまへるしもすう
まれるきは有信まで新雪殿の御きうとの頭中将
うぢつぶより出て月のすこしく海あるとて志とこ
のもとまとそりける後志しですぐ給けんこそいと
めしかれ もどき罪ゆりやうもありなんかしかや
うのことまつけてもまてとるれつれるさ人の
左心は何はめでたしとおもひこそして給ものかし

た心は、ゆゑいめでたしとおもひこそして給ひかうし。
我ころのひくるまてはなほつよふ心うしせ
おぼし給ひかほり。内（故ゆゑん）まゐり給ふんことはう
ゐくしくとしろとくおぼしなりて。去家をこ
そまゐりた面をぬを。おぼつるくおもほし給。又
これもしさへも抱しのくれば。さてこのだ物の君
とぞ。よろげまこれに罪しのへるまなほこれ（ほ）すくき
はころのやまぬまとも（故ゆゑ）とまれば此胸（むね）をけがし給
けくいけくかも宰家を（院ノ）はらんじまつらぜなり
ましをおもふ（故ゆゑん）ぶまいとおそろしきまいまさらま
まるさうとのこそしありて。我身はさうもれまて。
去家のはらめまうるしぶよりしぬことくいぞくき

なんとおぼせまいとおそろしけれバ此いのりを
さへきさせまてはことせひやませしてまつらんと
おぼしいたぬことなくのぶれまゐ(地)いりるまおり
まゐありけん(涙)おさまましうてちうぐさまつりまへり
こころかくしばかり給けんことは。しる人なまり
それバ(若ツイ)夢のやうなぞありけるまゐ(涙)ぶべきやうも
なくこそしけゞけしまへど(若ツイ)夢いとこゝまるまくもて
なるれ罪もまてどそてくれむまをいたうなやこ
まへぞちうさふひけるゝ令嬢(でん)年などぞおさ
ましうこそてまつりあつふ(涙ん)おとうはうしつゝし
とせひ罪し給ことかぎりなきまゝさしかるゆくさ給

とらへ[illegible]

うさんくすうちにて、ぶし心もうきまれば、あ
けてまれどいで給ひぞなりぬ。[右つぶ]ぬるやこま
おどろきて、人どちうまつりてしげうまゐへば、
[ほ]つれまもあらで、ぬりごめまをしいれられておい
て、ぬぞどもうしもうろ人のうろなどもいと
ひ[illegible]し。[右つぶ]家ハ[illegible]をいとまびしとおぼしなる。
[illegible]けなりてなまぬなやましうきさせ給



共アツ。宮の大夫（ミヤの中宮ノ大夫也）などまいりて。僧（そう）めせなどさは
ぐ。大（添）ねいとまびしうさくおもす。うらうし
てかれゆくほどまで。そこらゐゐるうくこまり
ぬ給つらんとはおぼしもかけぞ。人ぐもまゐれ
そろ夜どはさじとて。うくなんとも申さぬるる
べし。ひ分のおましまいざりいでくおりします。
よろしうおぼさるくなめりとて。（若人）やもまゐ
で給などして。おまへひとすくるまなるも思
れいもけぢくなりさせ給人すくなすれば。つくゐ
しこれものくうしろなどまぞさふらふ。命婦の君
などはいかまこぞりて。いざしこそまいらん。

こゝよひさへ御けあがらせ給ふもんいとおしうなど
うちさゝめきあつふ。添さゝはめりごめの戸の御そ
めよあさるをやをとしあけく。御屏風のも
ざ夜まいりたひいりなめ。めづらしくうれしさまも
なるべいおちてこゝてまつり給。なつが御いとくるしう
こそあれ世やつきぬらんとて。とれるをいづし
みへるをもらめいひしらずなまめかしうゝ程。御
かざものとゞまとてまいりすへたり。もこのふる
なぐまもなすけしきき夜まてあれど。いれ給
もす。世の中をいたうあばしるやめる気色まて
のどかなるなりめいりこまへる。いこじうらうらげ

のどくまなすがめいりこまへる。いろじうらうらげ
なり。うんざしりしらつき。れぐしのかりころさ海。
かざりなきまほりしさなど。こゞれこいの姫(芸)ま
こゞふ所なし。年(源)比すこし也ひ見すれこまへ望
けるとおさましきまでおぼしまへるかと。こゝふ
まくまず(源ム)こし抱也ひのもろけどころあっこちし
給けるうちづしげなるさ海なども。さしること
人と也ひきがこさ波なる波かざりなく。ぬるより思ひ
也め罪くてし心の也ひなしまや。さ海ことまいこじう
ねびまさり給まけるかと。こゞひなくおぼしまま。
心まどひしてや(源)とこゝ怯のうちまかくげしひよ
望てれぞれつまぬひきなし給けるひ也なく。

ざと匂ひたるは。あさましうむくつけうおぼされて。
やがてひれかしはへり。こゝにむこさはへりしとこそ
ろやましうつゝくて。ひきよせはへるは。れぞを
すべしをさてゐさりのき給ふころまもあらず。れ
かしのさりそへられたりそれがいと心うくすくをの
ほどおぼしたれて。いこじとおぼしたり。おとこも。
こゝろせをもてしげめはふれこゝろこれこゝだれて。
うけしざ夜まもあらず。よろげのことをなくく
うしこ罪しはへど。まことに心づきなしと見して。
れいしへもきこしはとず。こゝ心ちのいとなやまし
きぬうゝぬおりもあらず罪してんとのたまへど。

たばうくめおりもあくだ男てんとのくすのへど。
つきあぬれころの月どはつひつゞけ給ふ（落涙）ぞすゞうう
いろぶとさく給ふてもまづ子らんあくざりして
とらはあくれどおくあそてかとロおしうお月
さられば川しを地うらけとうらの給のぶれて。
こまひもあけゆくきめて（源）まるびさてしずんも
くうじけるく心をびりしるされけるひたすればくう（源詞）
だらりまてもとさくいうじとうれへをくるまく
ふけ給ぬべくいゑるまれお月けなき心も給へし
（地）みどふゆめこそてしすべしたすれめるうこしそり
うやうかするしひへおくれるうこしもそふるる
ともつしてくびひるげるりおけまつれげふくりとて。（三人ぬれ弁）

いとじきことぐも罕見し。(茲つか)愛はなすばはなるきやうなり
れかしき此心ぐるしかれば。世中(茲つか詞)まゐりとさうし
めされんもいとまづしかれば。やがてうを給るんも。
又これ世なすしあつことなり給ぬべきことなど。罕見
給もしくつけきまでおぼしいれり
(源)あふことのかたきは。かふまかぎしずもいまい
くよはかなげきつくへん。(源詞)れはぐしまもしそと
きてしあへば。(茲つか)さすがまうちなげきなて
(茲つか)ながき世のうらこは人まのうしてもかれは
心とあるとしてるん。とうるくいひなさせしまへる
ゝ海のいふかしなき心ちすれど。(源ん)人のおぼさん所に

海のいふよしなき心ちすれど人のおぼさん所に
口がれしあもくるしそれがまれまもあしでいでぬぬ
いげこをおもてまかはまさもそしてまけしむ
いとおしとおぼしたるぐらりとおぼして れふを
もとそて給えずうちしてて うち去 実まもまいり
給えずこもりおりして おきふしいとじかりける人の
れそろかると 人口ろく忘しうかるしとさに心
ぶましぬもうきまけるまや なやましうさへお
ぼさる もれ心ぼそく なすぞや世にふれがうさとそ
まされとおぼしたれまは この女君のいとらうる
げまて 衰まうちしれを罪しなへるをふりすてん
こといとかたし 実もそらぬ例にもおりしまきず

ほう
うりことさらめきて。こもりぬ。をとづれしまいぬを。
命婦などいひとおしがりしきしも。こやも（苗ヅイん）無安の御
こゝろおぼせまいれ心をさき給ふんこといとおしく。
世をのぢさるきもれまさひるり給ひ。ひさこちま
おぼしこのこともやと。こすがまくるしうおぼ
さるべし。うることしてぞは。いとぐしき世なり。
うきれさへもりいでなん。おぼぞ（無れ）ぎき紀のあるまじき
ことまのあふるる。くゝねともさりなんとやうく
おぼしなる。院のおぼしの給いせしさ海のるのめ
るらざりしをおぼしまるまも。よろづのことなりし
まもわらぎ。かたりゆく世まことそあれ。戚夫人（せきふじん）のこ
けむめれやうまとそあらぎとも。かるらぎひとまらん

おもわらずかたりゆく世にこそあめれ戚夫人のこ
けむめれやうにこそあらずともかるらずひとにこん
なることはなりぬべき身にこそあめれなど・うと
ましうすぐしがたうおぼさるれば・そむきるん
ことをおぼしとるに・去家こそまつらで・おもが
たりきんことあたれにおぼさるれば・思びやかなて
まいりまへり・大将のきこえはさらぬことぞに・おぼし
よらぬことなく・つうまつり給をれ・心ちるやまし
きまことつけて・れをくりにもまつりまらず・おほ
るのれとふらひはおるじやうなれど・むげなり
おぼしくしまけると・心ちるどちはいとおしがり
きこゆ・家にいらじうまつりしうおとるびまて

めづらしううれしと思ひて、むつれ[illegible]
[illegible]しと云なり給ふも、おぼしさろすぢにいとうる
げなれど、うちつけりを云給ふつけても、世の有様
あられは、ぞうるくうつりかたかことのみおほうり、お
ほ[illegible]の[illegible]もいとまづらひしくて、出入給
ふもつしさるく、ことよふれてくるしかれば、[illegible]乃
[illegible]あふもおやうく、ゆくしうよろげにつゐて
おぼしみだれて、[illegible]んどでひさしからんほどは、
うちのことぞ海まで、うさてげにかりて侍らば、
いかばかりべきと[illegible]へど、[illegible]とうち
まもりのて、[illegible]やうにや、いかでかさはなりる海

まゐりあて。或戸(おきぶ 長家女より)をやうまや。いかでかさはなりゐ海
もんと思ふての給。いふかひなくあられまて。それ(荷訂)
おいて侍れば。こゝにくさぞ。さはあらで。かゝえそれ
よりもこゞかくて。くろさきぬなどをきて。よねの
そうのやうまなり侍らんとすれば。こゝてまつらん
こともいとゞひさしかるべきぞとてなきこゝまへば。
まゐ(長家)ぞもちて。久(訂)しうおもはれば。悪しき物をとて。
ろうぞのおつれば。もづしとおぼして。さすがなそ
むきぬへる。れ(地)ぐしはゆしくとさうらまて。まゐ
のうへ。げに白ひまへるさ海。おとるび給まゐり
こゞか(源)れ。れかをぬぎすべまへり。れもれすらしく
ちて。くちのうちくろうて。思ふまへるゆりうつ

くしきは女なくてこそまつりごとさうらふ
かりけるうしもおぼしめさるゝこそ心うけれど。むかしの
きこゆる御ばうけしも世のよづきしきれぞら
おそろしう思し給ふなり。源氏(げんじ)の君はみやをいと
こひしう思ひきこえ給へど。あさましき御心の
ほどを時々は思ひしるさまにも見せたてまつらんと。
念じつゝすぐし給ふに。人わろくつれづれなり
おぼされければ。秋の野も見給ひがてら雲林院(うりんゐん)にまう
でたまへり。故母(こぼ)御息所(みやすどころ)のせうとの律師(りし)のこもり
たまへる坊(ばう)にて法文(ほうもん)などよみて。ひまんとおぼし
て。二三日おはするに。おもしろきことおほかり。紅葉の
やうやう色づきわたりて。秋の野のいと

て、二三日ならずみなおくれあるこそはかなけり。紅葉の
やうく冬づきもてゆきて、秋のけしきもたえまめくる
かみなどゝ給つぶるさともわすれぬべくおぼゆる。
法師(ほうし)どものつぶくあつかひおりめしいそぐ。綸座(ゑんざ)やさ
きそてこゝろめきて世給所からはなやぐ世中のうる
たよる紙おぼえしありしてもよう紙ありき人しも
みなとおぼし出ていそ。ぞしあけがたの有新に房う
しぐるゝのおとそゝまつるとて、うちくとうちし
つぎくの案内こうすき紅葉などちりしくしる
もちろみまうれどもびうるのいとゐるをいはせもつれぐく
みなず。後世(の)ろしあれましげうりさも何ぶなるさ
あをさまてなやむるかなど。笑しけげ給律師の

いとこうときこゝろまして。念佛(ねんぶつ)成生(ぢやうしやう)拵(ふしや)乱(ふしや)不捨とうち
のべてをこなひゐへるがいとこうしやましそれぞ。な
ぞやとおぼしなるまゝまづ姫(笑)君の心まうしまして。お
もひいでられ給ぞ。いと(地)ひろきはこころなるや。れ
いなしぬ日かずも。おぼつるくのこゝおぼさるれば。は
ふこぞうりぞ。しげうこゝろし給める。りまなれぬ
べしやと。心こゝ侍る道(こゝち)なれど。つれぐもなぐさゝん
がこう。こゝろぼそきまゝりてなん。こゝろしらこ
とおりて。やしこひ侍ほどをいかまなど。こちのくる
がこゝ。うちとけかきまつるさへぞめでこゝき
(源)あさぢふの家のやどりまゝをこゝきて四方の

あさぢふの家のやどりは思ひとゝまて四方の
あしぞ志げ心なきなどこまやかなるは女若も
うちなきぬ此色志なきしは
風ふけばまづぞこゝろくいろかゝるあさちが
家はかゝるさくがよとあり此てそいとおかしう
のこなり海さる地れとひとるこゝろてうつくし
ほゝ志こ給つねはさかしぬへだけが此まいと
よくまて いますらしなまめかしう女しき家
さきへなへりなまゞとなつけてもそしかし
あらず お目しさてかりしとおもほゆ ふさかふ
風もちかき目どまて 新院にも四大し給へり 中将の
君はかくこびのそらはなんものゝ思ひはあくがれは

けり後おぼしたるまもあらじかしなどうしこ
めて。朝子おまへは
係
かけまくもかしこけれどそれ神のあきなも
ほゆかゆふだすきかれ。昔後いまとおもひしまゐる
まもかひなくとりかへされんもれてやうにたれ
たれしげまからのあさみどりのかんにさり来に
ゆふつけるどかうくしうしるしてまいらせ給ふ
かへ里中将。文の詞まうざるくことろくてこさしかしこ
こと後たちまへ出るつれぐのまかりはせひや里
ゆへさすることおぼくたべれどかひるくのこるん
とすまうしこころとぐめておぼかり。朝子おまへのとゆふ

のるさしは

胡分 それ神やいかゞはありしゆふぐすさ心は
かけて志のぶらんゆへちかき世はとぞあり。此て
こまやかなはあらねどらうくじうさうなど
おかしうなりはかり。まして(添ん)鉛がもねびまさり
ぬへらんかしと。思ひやるもたゞならず。おそろしや。
あれこれ汁ぞかし。のこゝやのあれなりし
ことおぼし出て。あやしう。やう(新かん新文同やうとこ)のまれと。神
うらめしうおぼさるゝ。(此)ゝをのこゝろしきぞ
かしゆりなうおぼさばさもあるべかりし。年ごろ
ものどかなすぐしぬて。今はくやしうおぼさる

べかめるもおやしきはらろなりや院（沙のんこ）もかく
なんべてなるぬはらろたんべをこしり罪人なんれだ
し夜さうなる御座などはえしもまてたるれ罪人語
まじかめりすうしあひなきことなりかし六十巻（ほ 天台こ）
といふつゝしまみのひおぼつゝるき所ごとうせなど
しておりしますは山でらまいらじき光をとなる
ひいだしてまつれまと佛のはめんぼくありとあ
やしのほうしがるまでよろこびあへり志あやか
まて世中をおもほしつゞくるまゝんこともれ
うりぬべかれば人ひとりのはことおぼしやるが
ほどしなればひさしうもえおりし夜さで寺にも

さす路いかしうせさせ給はんべきかぎりなん
きものゝそうどもそれはかりの山ぐちまでまゐらせ
ことゞきこともかぎりをいらしてぞ給ひける
まりをうちとりてこれもみれまよおやしきしば
ふる人どももありまりかて涙をおとしつゝこそ
まうらむさきれ車のうちよりてよぢのれ袂(たもと)ぬり
やつれかへればことにいとおしく給へれどほのかにあれあ
つとさ涙をながせまろく思ひこしめべかめり

女君（ほん）は日比のほどるねびまさりゐる心ちして
ひとしうさしげまりゐて世事いかゞあらんと思へる
氣色の心ぐるしう哀におぼしたまへばおいなきこ
ころの三面ぐらぐるしやさりらんいろかるると何
ましもらうたう若くて つゐよりことはかたらひ
寄て給山ばどにまたせたまへりし紅葉おまへの上
ばらんじくらぶれだことはそめましけり家の
心もうすぐしがたうおぼつかさも人けろさまで
若くなへばたゞ大かたまて家（右つ本）はまつらせ給命婦
のまとるいらせ給（右つ本表家へ文ノ詞）はけり紙めづらしきことく
うけ三面けるる家（表家）のあひだれことおぼつかるく

なり侍るなれば志げ心なく也のへなどしをこなひも
つとめんと思ふち侍し日うぢでをこころなりしぢ
やとてなん日ごろるなり侍けり紅葉ハひとりみ
侍にまゐしきくらうせうまゐれば なん おりよくて
ぶらんぢきせのへなどありげ（家人）よいうじきえぐども
なれば御めとまりは例のいさしうるりも此ありけり
人どこうてまゐるは御かの色もう川ろひて
る後かる心のこと給ふめこそいとうとましけれ
あらしせひやつまゐりも此し給人のゆくりなく
かやうなることありくまぜ給をひともあやしと
こうらんうしと心づきなりおぼされて うゑんり
さてをてひさしのくしのもとまをしやしせ給

こゝろんうしと心づきなうおぼされて、うれたり

さてをてひさしのくしらのもとまをしやらせ給
ひ、おぼ(匹)るのことども、(妻)女の御ことにかれこゝろ
なきどをがうちられめるを夜にすくよりなる御かへ
まだうりきこしまへる代(源ん)をもこゝろうしてく
つきをずもとうしめしうしまへどたまごとも
うしろうしまへるまひまれば人あやしとこ
とぶめもこそきれとおぼして(若)まうでまべき日
(源)まいりまへり、まづ内の御ことまいりまへれば
のどやうるおりしますほどまてむかし今の御物語
きこえし給ひくちも院にいとよりまこてまつり
まていますそしなまめしきけそひてなつしう

なまじやうまぞおりしますがうこゝろあれとこゝろて
まつり給ふ（清門公）んの君（勝月）のれことゝもうる代こゝろぬさ海より
ちこゝしめし氣色ゆゝんずるありもあれどうまゝは
今さじめこゝろとうるしばこゝてあらめ何りそゝめる
けうことおればさも心かくらんはうげうまうまじき
人のあれひなりしとぞ思しるしてどがめさせ
給はざりけるよろづのれもれがたり文の君のおぼ法
なくおぼしめさることゝもなどゝもをもて文
すきづくしきうるがたりなどもかくこゝる罪人は
させまつりでまぶれ（清門）無家のなぐり給し日のことゝ
かたらのおりしうおはせしなどかくらせたまふる

（源）ゆれもうちとけて、のこゝやのあられなりし所け
ぼのも、これ実といでゝまてぐり、廿日の月やうく
さしいでゝ、おりしさほどなるまゝ、あそびなぐもせ
まほしき程なるまゝの給ふ事、中（源行）宴（茲）のと夜まうで
給なるとふしひまもれし給ふん、院の給ひせを
くこと給しかば、又うちろ三川かうまゐる人も
給しざめるまゝ、悪ぶ文の所ゆかりいとおしうせひのまへ
られ給てとそうし給ふ、悪（源行）ぶ文をばいまれみそり
なしてなどの給ふを、亜（とき）しかばさりゆきて心
ざしまれまれどことなるさしゆきてろさ海のもゝなる
ことをはとてこそさしの程どよりもゆきなどの

けざとりしこうこそ抱しおべ久れ、なるまどもまも
まかぐしりしぬ、男げりのおまてをうしけり
なんとのる所なきれば、おほ(係詞)りこし給けざなどい
とことくおとるびこうさ所まもれしおへど
まざいとかこなりまなん、それはありさ所など
そうしおてまうでおまし、大安(熟語)のはをうとれ、殺(とう)大納言
のこれ、頭(とう)の弁(べん)といふがこうまあひたるやうなりけり
人まて、やふことなきなるべし、いまうとのれいけい
でんのはりこまゆくま、犬(係)の子のみさきをしのび
やうまを人だ、たゞ(以弁)し立とまりて、白虹(しろう)日をつく(まほうイ)熟
けり、太子(たいし)おぢこりといとゆるしかまうらすじこう

けり君子あぢさりといとゆるしかるうちすじたり

をだ(添ム)ねいとまばゆしとこそしまへどせぐがむべる

ことかはさ(熟)さ紀のれかしかさはいとおそろしうは

づかしげよのミ事ゆる後かうしてしきへぐもけ

しきざちいふべかあることだもあるはづこそし

う見されかれどうれるうのミもてるしまへり

此(添詞)前りさふしひていまくでふりし後はけるとき

そ給(添ム)月のくるやうるるまむりしかやうなるか

ありハ此あそびをさせまていまかりしうもて

なきせましなどおぼし出るまれるじみうき

のうちるがしうられることおぼくかるし

(右)こくの人まさりやへざつ雲のうへの月を

たるうまさひやるかなと命婦してきこえしつたへ
給ひけるひもほのかなれどなつかしう笑ゆるる
源ひ
ひしさもけまされて先なるこゝぞおぼる
源
ほかげはうし世の社まかうしぬをへぐ川る
きりのつらくもある事かすこも人のとかむりしも
伝けることまやなどきこえしぬ源ハ妻ぐ女をあらず
さひきこえしまてよろづのことを申しさをしまへど
かうもおぼしいれたらぬをいとうしろめたく
さひきこえし給例ハいとさくおほとのごもれりせい
で給までいおきたらんとおぼしてなるべしうら
うしげるおぼしたれどさすがまえしたひきこえし
給そぬ源ひいとあたれとこえてまつり給大ぬハ朝年

給ふこそあはれにおぼえてまゐり給ふ大将は(源氏)頭弁(とうのべん)
のずんじつることを心のおに世中わづらは
しうおぼしなして(朧月)かんの君にもおとづれきこえ
給はでひさしうなりにけりはつしぐれいつ
しかとけしきだつに(朧)いかゞおぼしけんかれより
(朧)木がらしのふくにつけつゝ待しまにおぼ
つかなさのころもへにけり(源氏)とありおりも
あはれなるにあながちにひきしのびてかき給へらん御心ばへも
にくからねばつかひとゞめさせてからのかみ
どもいれさせたるみづしあけさせてなべて
ならぬをえりいでつゝふでなどもこゝろことな。

ひきつくろひ申へるなしきえんなるをおまへなる
人ごとれどうりなるんとつきしろふ（源ノ通）ゆきさせても
かひなき抱えりよしてむげよくげをれよをれ弟
のこゝもれうきほどよ

（源）あひしずてしのぶ此の洞をもなべての秋乃
時夏とやこゝろのうちにあるらバ（久ノ詞）いかよしすぐ先乃
雲も抱ますれし詩ゝんしまどこまやかに成よかり。
（比）やうよおどろかし罪ゆるしづひおほかめれど。
しまさけなりしずうちかへりごちなてはこゝろには
ふかうしまざるべし（右）伴家ハ院のはしてのことよ
うちつゞきは八講（うう）のいそぎをさ風ぐに心げかひ

きさせ給ひり霜月のついたちごろ此國忌なり
ま雪いたうふりたり大将殿なるもうめに宮たち給
別にしたふはられどもこし人にはあふ程は
いかとこれまん いづこまもたふは拘がるしう見さる
ほどにて此更あるも
なすがらふる ほどはうたれどゆきめぐりたふも
その世に多迷心ちして ことにつくろひてもあらぬ
れかきざ夜なれどあてにけこうきはしひなしなる
べし しぢかもりいまめしうはあらねど人りも
ことにかしせのへりたふはこれはことも思けちて
衰なる雪のしげくにめれくをこなひ給十二月

十ゝ日ばかり中宮の御八講なり。いとゞうとうとし。
日ごゝ供養ぞさせ給ひ程なりけじめ。玉の軸。座の
へうしぢしてのかざりもよゝまるさき海ゝとくの人させ
まつり。さしぬことのうさらしごゝ。世のつねなし寸
おりしませばまして。ことゆゑなり。佛のれかざり。花
づくえのおほひなどまで。海ことの極楽をひやらる。
そじめれ日ハ先帝のれれう。つぎれ日ハ母ぎさ紀
のれうめ。又の日ハ院のれれう。又寒の日なれば上達
めたども。世のけしましさ給えしもたゞかり
給ひでいとあまたまつりまつり。かふのううじそ
心ことゝえらをたまへば。ことゝこゝなほどより

心ことはえらしをしたまへだ。しかしたゞこゝろのほどより

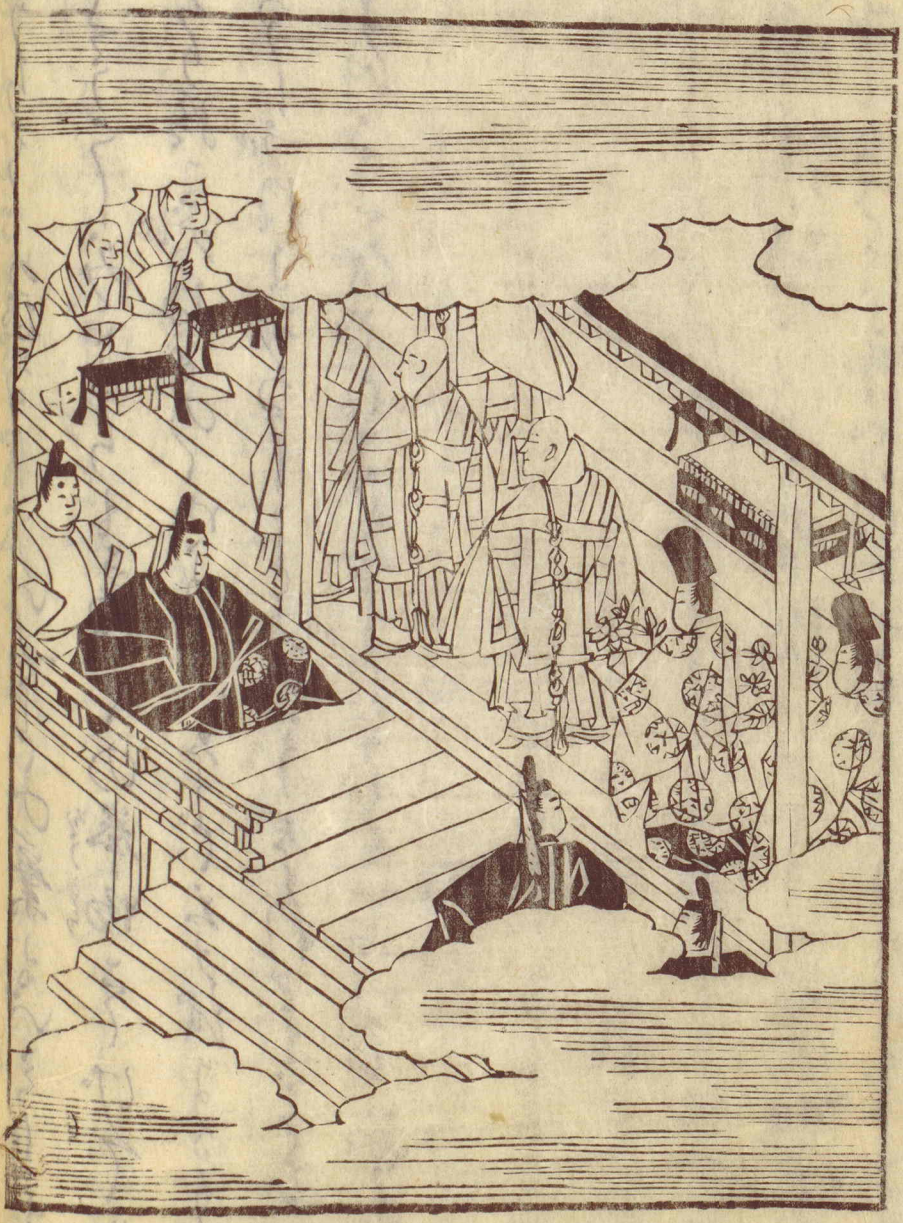
うちそじめおちすじういふことの葉は。いえじう

こうとし。みこゝろもさ海ぐの奉物(おうもち)さしげてめ

くり給は。犬(ほ)ねどのゝれこのういなまど。なす紙はるもの

なし。つ(地)ねはおろすしことのやうなれども。えこそて

まいるこびごとは。めづらしからんをばいかゞ世ん



なくての日、我は叟を語願まして世をそむき給よ
し佛は申させ給ふ。これ人どおどろきなめ。等々家
大将の御心もうごきて、おさまりとおぼして、みこは
なりだのほどよりていりなめ。心づくうおぼし
しろき海をの給ひて、たゞるほどよ。山の座をめし
ていむことうけたまふべきよしの給ひ寺。御をぢ乃
横川の僧都ちうまいりなて、御ぐしおろし給ほど
ま。文のうちゆきりて、ゆしきうなきこちたり。ちる
とるきおいおとろへたる人どよ。いまはと世をそむく
ほどはあやしうあはれなるわざ。ましてうみて
御気色はもいづし給はざりつることなれば、みこも

いこじうちゝさ給まつりこまへる人でも。おぼゆこの
ことのさ夜も。衰ましうとそれだ。これ袖ぬらしてを
えり給けり。こ院のみこゝちハむかしの内者様を
おぼしいづるに。いとゝあそれにかるしうおぼさ
れてこれとふしひ罪しお紙。大将ハこちとまりなて
罪しいでおべきうこもくれまどひておぼさるれどか
どうさしもと人こゝてまつるべそれが。みこなどいで
給ぬるのちまで。おまへにまつりこまへる。やうく
人しげまりて。女房ども。などとかうちかこつ。取ぐ
にむれぬこり。月はく夜なるさに。雪れひかりあひ
こうりは。のぼりさ夜も。芳のことおもひやらるゝに

いとこへがこうおぼさるれば、いとようおぼしたげ
めて、いかやうにおぼしたてをまて、かうにはかな
たと、ぬれ給、いまさらじめておもひしまふことにも
あらぬを、もれさはがしきやうなりつれば、心こゝぞれ
ぬべくなど、例の令嫁してきこしめ、三寸のうちの
けちひ、そこしつどひまふ人の、きぬのをとなひ、しめ
やかにふるまひなして、うちこぼろきつゝかるしげ
されなぐさめがたげに、もりきてゆかしきことと
たりにいこじときて給、此たげしう吹ふぐきて、
三寸のうちれにほひいと抱かるさくろぞうにしたてて
こやうがうれ煙も、ほのかなり、大将の御にはひさん

かわりあひめでたう極楽(ごくらく)せひやしるくよれさ海なり。
去ぐ夜のれ川かひもまいれり。の給ひしさ海なりひ出
ゆえさせのよぞれこころづよさもしへがこうて出(若)返を
ゆえさせやしせのなれば。ちゐ(涼)ぞことくるへこさて
させ給けるこれもくあるかぐら。心おさまらぬ程なれ
ば。おぼしてことどもしうちいでのなぎ
月(涼)のしむ雲ゐをかけてしたふともこれよれ
やこまなをやまどなむ。とせ(涼)ひしまへしるこそ。
かひなくおぼしたせしまへるうしめしさは。
かぐりなうとぐりこそしのて。人ぐちかう
さふしへば。さ海ぐこぐるくころのうちをぐる。

えたまへあらはしおもぶいぶきし
おぼ(茲)るのうきまつけていとへどもいけ(ハ)此
よ後そむきたりべき(地)川まぢりつなぎ。うたへも
れつるひの心をしひるるべし。衰(涼ん)のこつきせねば。
ひねくるしうてまゐでおぬ。とのまてもけがれ
たまひとりうちふしおて。れめもあれ。涼世中
いとをしうおぼさるくまも。去家のれことのこそ
心ぐるしき。(茲)たく家をぞるおぼやけぐるまとおぼし
をきてしをよれうきるしへぞうくなりおひまれ
だ。まとのれうねまてもえおもじ。けれさへ寄り
をてくをなぎ。おぼしあらすことかぐりなし。今は

かゝるさ夜の御でうどぞもなしそもとおぼ
をば年のうちよといそがせ給。今夜の君も御
ともまゐりまされば。それも心ゆかうとふらひ給。
(地)ふらしうひ川ぐけんまとくしきさ夜なれば。
もしてげるあり。さるはかうやうのありこそ。
おかしさうな夜などいでくるやうもあれ。さうぐ
しや。(源ノ)まつり給もいまは川くましさうすらぞて。
御身げからさそて給ありもありなり。心しめてし
ことは。さらまは心はもなれねど。ましてあるまじ
きことをするとかし。(源氏宮文)としもかくるもぬ程だうら
けたり。笠やうまゐいえん。さうれどさて給まも(放ん)地のミ

哀まてれとこるひとめやうまき給ひぬ。のちの世をも
ことゝのこえきゝまされもしくむつかしりしこと、
わすれておぼさる。つねのはねんとゞそばさるまれ
まそごとまそふれる。ごうのまえのこれみ 三条実門
まおもりてすゝしきるれきるまわりてせあて。
とりわきてうれしとるひとをゝせ給。ちわまかりあん 源
まゝおもふまゝちるしもるゝく。家のうちのざるま
人めまれまて家づくさどものきてしきぞう。
うちうかされてぞるしまやあんくしいけるま
おもくりおぼむまぞくりぞ。猶ひさく命も身まて。 中宮入内之
女房なとのみけるざくろきうもまりつどひあし

かんぶちめなどもこちをよぶつひきすぎて。むか
ひのおほいとのまつどひの代。かんべきことなれど
あられはおほさるゝは。子人はもかへりべきれさ
夜にて。ふるうしぶねまつりのへるを。こゝろはあひ
なくなるぶぶ聞る。まらうともいとものあはれなる
かしきは。うちこまとしのてどんはものの給
ず。さ夜かたれる此を夜ゐり。こすのたし。此来
丁のあ代にびにて。ひまぐより御のこしこゝ
うすにび。くちなしの袖ぐちなど。中こなまめし
う。おく座しうせやられ給。とけまゐる池のうを氷。
春の柳のかしきがり時とますれぬなど。さ夜ぐ

ながめられなて、ゆべもいろあると志のひやうに
うちずじなへるまゝなるうな夜めりし
源ながめるあまれすゝ家(ウ)ところゝまゝげ
志ほとゝく松がうらしまとこゝてしまへば、おく(荻)
かうもあらずこれほとけにゆづり罪なへるおま
しぶ所なれば、ぜとうしけぢかきこゝちして
荻(荻)ありしよれ名殘(なごり)ぞなるきうらしまゝに
ちよりなこれめづらしきれとのくまふもほ志
罪ゆれぞ、志(源)のぶれどなるぞほろくとこぼ袖
なぬぜとせひすまりしるあまぞしちのこゝろんに
りしるければことずくなるて出なぬ、さもしぐひ(荻ノ女えうん)

なくねびまさりなかれ心詳(もと)なる前なく世にさん
時にあひなし時にさらひとりもれまてなるまくつけ
て無をおぼしたらんとぞしたられなしを
今はいといたうおぼしたりけめてぞうるさことに
つけても抱あられなるなしこそさへそのをなるに
あひなう心ぐるしうもあるかれなどおいたらへる
人どうちなるさりしめで冥ゆ安(茲)もおぼし出ること
おほかりつるさめしのころこれ(茲)こやの人は給はるべき
りきもえぞおほかるのごうつもなくても安(茲)乃れ
こうがりまてもかるらずあるべきかいなどせごる
を濃などしてなげくこぞひいとおほかりうくても

を御などしてなげくこゝろひいとおほかりかくても
いのしりと御ゝらねをさりこゝふなどのとまるか
べきまもあらぬ後ことつけてかけることおほかり
これかゝておぼしまてくしせるれど家人だとも
より所なげにかゝるしとせへるそしきどもまつけて
ぞ御心うごくおりくあれど我身をなきまなして
も東宮の御代をこいらかにおくしまさばとのこ
おぼしのゝ御をこなひこゆゑなくのとめさせ給人
しれどあやうくゆくしうせひまもおふことし
あれば我にそれつゝ後かろめてゆるしこまへと
佛を念じこさしおまよろのをなぐさめ給大将も
しかゝてまつりまてことちりとおぼせ此殿の

人どもく文あるじさ海まかりきことのこゝあれば世中(源ん)
りしるくおぼされてこもりおはす。たのおとゞも。
おぼやけ口さくしひきかへたる世のありさ海り。
もれうくおぼしてちじのへうしてまつり給を。
みかどハ故院(こゐん)のやんごとなくせもきれうしろこ
とおぼしてながき世のうさめとさてし金給し。
れ遺云(ゆいごん)をおぼしめすまゝすてがたきもれまさひ笑
あへるまかひなきことくしらびくもちゐさせ海
ゐるどもめて(た大臣)かへさひ口まてこもりゐるめ。今(地)ハ
いとゞひと(左大臣ノ)ぞうのこゝかへもいくさかへまことかぶり
ケしせのおもしともれしまへるおとゞ(た大臣)のうく

世をのがれこまへいおほやけも心ばそうおぼされ
よれ人も心あるかぎりそそげきそり。れ（左大臣ノ）こともそ
いづれともなく。人がしめやすく。世にもちゐられて。
心ちよげにもれしなしとこゝろうしげまりて。
三位（中ノ女）中ねそども世代おもひしげめるに後こゝになし。
かれ四（左大臣ノ女）の君代もなほかれぐりうちかたひ何く
めざ後しうまてそされこれ。ばこゝろ（左大臣）とけしこる。れ
むこのうちにもいれ給へずおもひしれとにや。
これこびのつさめしにもれぬれどいとしも（以中ム）
おもひいれど。大ね（源）後かうしげうまておとすする。
世（以ム）いとうるさきもれとこしぬるとまして。とりと

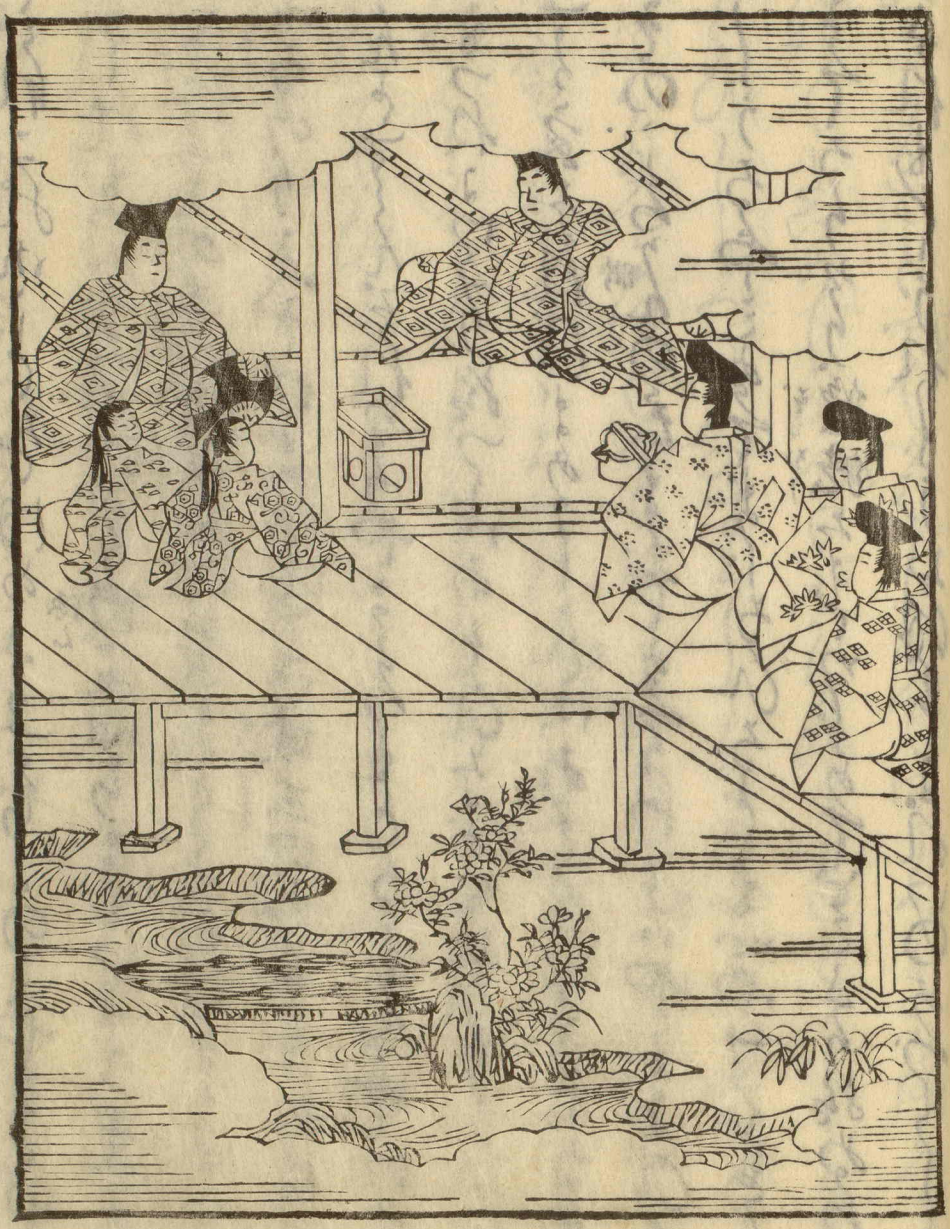
おぼしなしてつねまゐりかよひまつくがくもん
をしおそびともまろともまし給ふいにしへもく
のぐるおしさまでいどこさてしましとおぼし
いでゝうるこうまいまもそうるさことまつけけさ
すがるいどこまへり春秋のこど程をばうかもの
まてつまんじまもさ海ぐしうとさことぐも代せ
させ給などしてまるいろづるまいと海ありげなる
たうせどもめしあけめてふこつくりおむふさぎ
などやうのすさひけざどもをしなどうろ代
やつまて文づへをもおさくし給ふとぞ代うろ
まゐせてぐちあそびておもするを世中まは

まゐせてうちあそびておもすると世事にはけ
ぢゝりしきことゞもやうくいひ出る人ぞあるべし夜の夜のどうまゐりてつれぐなるころ中ねさるべきしふだおまゐるまゐるまてまゐりまゐりとのまもふどれあけさせまてまぶひらゝぬまゐしだのめづらしき古集のゆへなるらぬすうしえりいでさせまてそれ君の人ぞけざといあしほどおもるめしたり夜ぶべも大学のもいとおほうつどひて。ひぶりしぎるこ海とりまゐるけるしせまゐりまけものどもなどいとまゐるくていどこあゐりふるぎまてゆくまゐるまゐるさぬんのもしだいとおほうて笑あるりせどもなどのまどふ面ぞと時ぞうちの給こ海いとこ

よろまきれざしの程どなりいりでかう志もしこひ給
けんなるをさるべきまてよろづのこと人にすぐれ人に
成かりとめで望ゆつねに右（中）まけまかり二日もとり
なりて中（中）ねまけわざしまへりことくしうはあら
でたまめきしろひまりごどもかけ物などさ海ぐ
まてかふも例の人にお得くめして文などつくせ
給ひしのもとのさうびかしきいりささて春秋の
菓ざりよりもしめやうまおりしき程なるまうち
とけあそび給中ねのれこ（初梅太左衛之）のごとしつじめて食ど
する八月九月ばかりまてこ急いとおもしろくさうの
ふえふきなどする後ぐ月ろしまてあそび給ぎの

ふえふきなどする所ゞ所ゝしまてあそび給ぞの
まこゝりのごらうなりなり。此人のおもへるよせ
おもくておぼしとるりしげなり。うゝろぐへもか
どくしうゝろちもおかしくて。此あそびのを
うしこゝぶれり程よ。うゝさゞう所いゞしてうしふ。
いとうけし。大将の君はぞめざてうげけれい
よりいうちこゝぶれまへる。此かゝのまゐひまうもれ
なくこゆうすもれてなをしひとへをき給へるます
こゝ海へかゝぐつきましていこゞうこゆうをとし
光なる博士（はかせ）どもなどゝをくこなりて潤（なまぐ）おとし
つねなり。あくましもれをさゆりそのとうしふ
をぢめよ。中将此かゝらけまつり給

それもとけさひらけるもつ菓におとらぬ
君がまほひをぞこうほく思うてさりのふ
時(源)ならでと朝(けさ)さく菓も夜の夜に志ほれに
かくしにほふほどなくおとろへまるる物をとうち
さうどうさてらうがくしくさうしめしなすぬどがめ
いでいく志ね罪し給おほ(地)ありしことぞもかやう
なるおりのまほなるぬことうぞくまうさつくる
心なきわざとかいしゆきかいさめしうなくる
まてむつしかれがとぐめり



これこれはことをほめたるすぢにのこやまとのも
ろこれもつくりつくけたり。けがれ心ちにもいたう覚し
をごりて。文王の子。武王のおとうとくうちずじにつる
はなのりさへぞげにめでたさ。成王のなるとりの給も
んとすらん。それがりやこころもとなるらん。帥の家
もつねにけたり給つ。はあそびなどもおりしうおは
する家なれば。いまめしさはあらひどもなり。
そのころかんの志まりでにてり。けらいやこるひさ
しうなやこにてまじなひなども心やすくをん
とてなりそり。修法などいじめて。をこたり給ぬれば。
これもくうれしうおぼしてにれいのめづらしさ

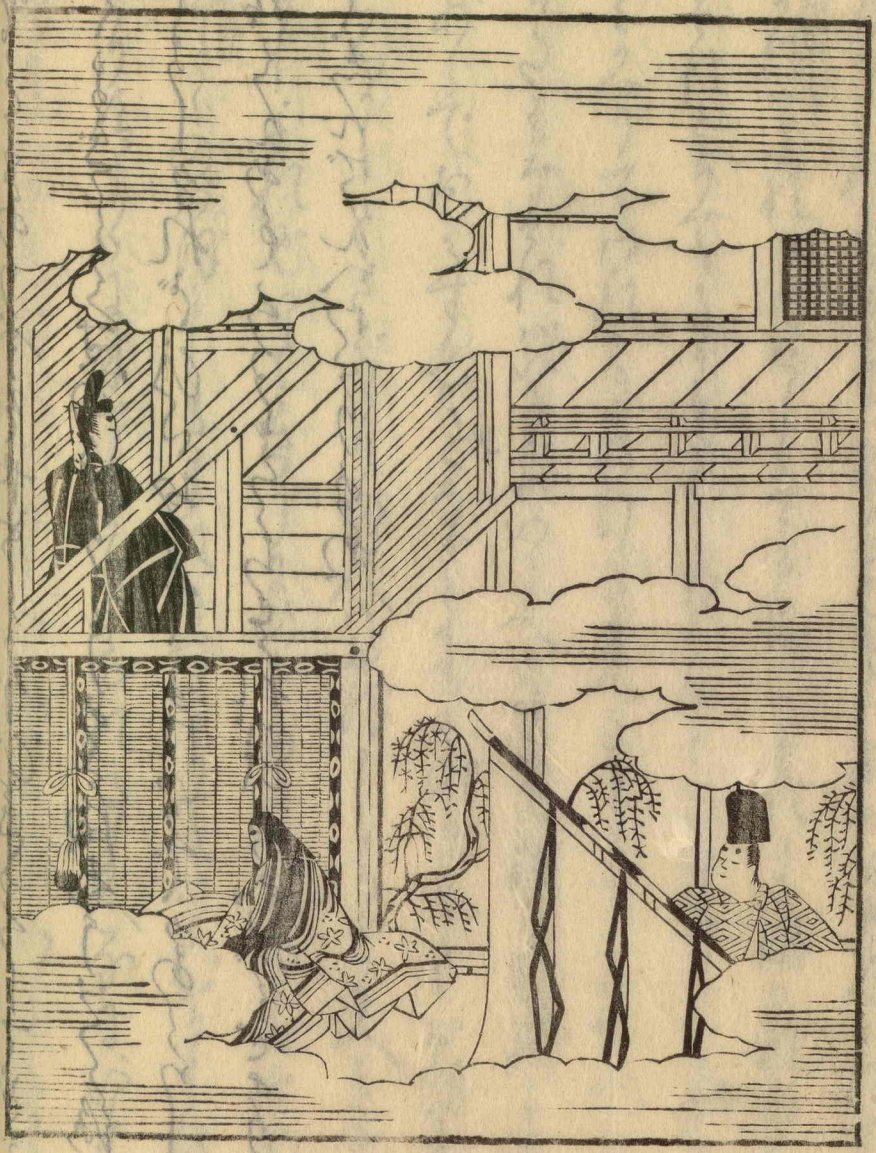
ひまなるときは涼しくしのせて。けりなきさき海て
それくしあし給ひ。ときうりに。うきさくしきさ
けらひしのへる人のすゑしうちるもやそて。やきく
まちよりのくる母が。ひとおりしげるり。こゝさいの文も
ひと弟まおそすりろちすれば。けるひいとおそろし
されど。りうとしもまきろれんをたすれども。ひと
悪びてさびくまりゆけば。学文らん人でもあるべく
めれどうまつりうて。恋ほはさるむとはけい
き涙。おやぐきるおもひけあちめる。母はゝかり
おどろくしうふりて。神いくうるりさそくば。曉に。
とのくさんぐちらやつくさちがしちつされてださて。

しるこうるこの人めしげく女房だもおちまどひ
てちうつどひまつるに（源）いとまうるく出給いんうる
なくておけしてぬ。ゑ（ちやう）怯のあぐりにも人ぐしげく
なまねられば、いとむれつぶらりしくおぼさる。うち
しりの人みたりぞうり心をまゐどさす神なりやゑ。
面をうしをやゑぬる程ぐる。おとぐ（右大臣）ぐりなりてまゐ
（熟）安のれりこにおりしける成むらさめのまゐざれにて。
（勝）えしりなもぬに。うろうらに（右大臣）みとりひいり給てゑす
ひきあけ給まらに。いりまぞいとうしてありけり
夜のさ夜に。おもひやるに寄しなぐらに。まりこでなん
（右大臣息）中ね。安（中宮大夫）のまけるどさふらひつやるどのまふけらひ

のぶるとよ何をつけき成大ねはものゝまぎれまま
左のおとゞの此有様ふとおぼしくらべられてゝと
しへるくぞ得ゝ思まれおげよいりもてゝ毛ぬん
おへりしおかんの思いとまびしうおぼされて
やをらねざり出およおもてのあるゝ成る成
なまやましうおぼさるゝまやとゝおひてなどに
氣色の例るゝぬ也れけなどのむつりき成ず得
うのべさすべかりかりとのゝまふよ。うすふゝあひ
まるおびの此ゞよまりそれてひきいぞられるを
ゝつけおてあやしとおぼすよ又ゝむがみ乃
てなまひなどしゝる此末丁のもとゝおちゝり

なりされはいりるまう抱どもぞと此心おどろかれて
かれはこれがぞ（大夫臣詞）そしきことなるもおくさ海かれおへ
それとりてこがぞとこ侍らんとのまゐまぞ（勝）うち
ミかへりて・ウれもこいけこまへる・まぎらいすべき
なるもなされば・いりぐはいくへきて給ひむ・我にも
あらでおこすかを・（地）こるがしもちげりしとおぼす
らんしとさぞりの人はおぼしちぐるべきぞ
かし・されどいとこうにのどめこう一所おもをぬ
（太平）おとゞのおぼしもまはさずなりてこゝむがこ我
さり給まくに・末丁よりこいれこまへ家に・いと
いこうなるとびてうくましからずそひふしこる
おとてもあり今ぞやとしかゆひきかくしてどう

いたしなるとびてうてましけるずそひよしいる。
おとてもあり今ぞやとらかゆひきかくしてどう
くまぎらはすあさましうめき面志ううら絡
やましそれどひさおもてはいりでかあらけ
絡たんめもくるとちらもれば此ことむがきをとり
て志んでんへいたりもめ



りんの君はけれかれこゝろしてしめべくおぼさる
大将(源ん)殿もいとおしうつゐよようなきふるま
ひのつもりて人のもどきぬなんとまゐ
ことくおぼをど女君(聯)のこゝろぐるしきれかし
こさぬさらくなすぐさめこさてし給おとゞ(右大臣)はおもひ
のまゝりはこゝあるゝ所おちをめ中上(おんよう)はいとゞれい乃
れひがこさへそひゐまこれいるまごとまうをど
ぞこほり給はん ゆくゝと変(独)にもうれへきこえ給
かうく(右大臣詞)のことゐん得をされこゝむがみも右大将の
れてなり無しも心ゆるされておりそめまける
ことなれど人がらまゝろげのつゝぬゆるして

さてもらんといひ侍しおりわらは（源ノ）もとくめさせて給ん
ぶつしげなまてたてまつれるしろがやすくしずめむ路
へしうじきうべきこそやそてせまけれさうた
（宮ノ）おぼしさしりまへりきさされこそてうくほいのごとく
なりるすぐくろ成されもくどりありてうけたりけれ
女流おもざまもいかを侍しめそぐまおろそうちかし
思ひかうかむかうこそさん侍られざさらり
いと心うくなるんおまひなり侍めりかおもこれ御とはい
いひらずくも大将（源）もいとはくしめ流るころなりかり
（羽衣）朱雀院もなる低冷泉おもしつつむのびる院丈りる
さしなぶしてぞしもあるべしるをへのさり
給しなる世のつめのさまもおしはげられる

[illegible]

ゆしなきせのゝめのこゝもあしぎけがこめるも

うゝまじこゝとなれば、よもさうかまひやり

るきけざしらでられじとなんどきれいうそく

とあめれしるをなびかしまへるさ海ことなあれば、

源 大将の御心をうるがひ給らざりつゝなどのゝまゝる

熟 宮はいとゞしきに御心なれば、いとゝあれしきに気色

まてみ 熟詞 じさきこゆれど、むかしよりこれ人思ひ

かしこきそして、彼仕の御とゞもまゝなくかしづ

ひとりむ 葵 すめをこれかゝの対 ぞう 朱雀 まてかくすかは

してまつらでおやうとれ源氏まていとさるゝきが、

元服 ぞんぞく のそひぶしまとりけき、又この君をも宮づく人

まと心ざして侍しまおこがましかりしありさ海
なりしをこれもくあやしとやなげしたりし。
これかれこうるまこそ此心ことを侍ありしをそれ
ほいたづふさ海まてこそはかくてもさふらひたまふ
めれといとおしさまいかでさるかまても人は
をとらぬさ海はまてるしこそてんさげりねたげ
なりし人のこゝろ所もありなどこそは也詩つれど
ものびゐて[朋ノ]ゞ心のいかゝるまなびさ給はこそは
侍らめ勝院の此ことをもまして さもあらんなる
ごとまつけてもお目やけの此かるまうしろやも
うし寸こゆるは其家の御世こゝろよきことなる
人なれば心とうはなんあめりとすくくしう

くしずこゆうハ去家の御世ろろやうもこしかかる
人みれバことろりまちまんおめつとすくえう
のさまひけバくるまをすゞまいとおしうおもどき
えつくしくぞとおぼされバさゞれおぼしけ
ことしゆし給ひし御よもえりやさせ給あずく
のごくつこ給りしもおぼしまけまじきことこの
まそおまえて給ふるべしづちくまセいしの給
くんハなくて給しもてもいたれつるるくでこゞけうく
あくり給ふんたバこえてしるをいてまへどゆどうう
此ろしなくもおそくすゞくひと所まおもうして
ひまのもるさるうつむ所おうりさそいり抱きうる
んハさくしるうろめろうざくうくまるこそそやおぼ

しをするいとをいとうめぐ後しくこれ以
いでいとうべくとくべくとくべくとくべ
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

69038
6AP78